

捕物鉢合せ

出齒亀の新熟語を作つた池田亀太郎が、まだ捕縛されないで、大久保附近の物情騒然、毒手に斃れた美人の芳魂空しく宙に迷つた時の事である。

「どうかして此の犯人を俺の手に捕縛てやらう。」と事件發生地の所丈に一層力瘤を入れて、寝る眼も寝ないで、捜査に一生懸命の新宿署のMと言ふ刑事、

「犯罪の経路と、現状の様子は、適切此近所に住んでゐる奴の出來心に相違ない。」と目星を付けた揚句の一策、毎夜々々女装して犯罪

地附近に網を張つて待構へてゐた。

功名心は同じ某署の刑事、これも目の付け處は同様で、印袴纏の職人風、洋服扮装の會社員、さては緋の着物に袴を穿いた學生風と、様々に變装して、大久保から戸山の原一帯を毎晩犯人の手懸りに腐心してゐた。

「おい、一寸待てッ。」と突如眞暗な物蔭から怪しい印袴纏の男が飛出して、女装のM刑事を呼止めた。

「さてこそ！」と手具脛引いて待つてゐた喜びを隠しながら、態と恐怖の様を見せて、返事もせず小走りに逃出したは犯人を誘ふ策畧、さりとは知らぬ此方の刑事、今時分こんな淋しい處に怪しの女が出

没するのは、戸山ヶ原の監的壕に時々露營する兵卒達に情けの切賣を目的とする魔性の女、多寡が拘留處分の代物ではあるが、其處は職掌柄見逃しもならず、呼止めて見ると、案の定逃出しながらも、態と暗い方へ暗い方へと誘ふ様子、

「どうで今晚もあぶれた、其腹癒せに此女の巢を探ぐつた上で捕縛つてやるのも、時に取つての一興だ。」と思付いたから、此方も態と聲を小さくして、

「おい姐へさん、白歯くれて逃げる柄でもなからうせ、どうだい安く遊ばせねへか。」と追蒐けて袂を執つた。

「あれつ、何をなさるのです？」と急拵への女の假聲、躍る心を押

へながら、片手は袂の中で捕繩を握つてゐた。

「素人臭い聲を出さない。此夜更にこんな物騒な處へ迂路付いてゐる素人女があるかい。おい姐へさん、あれつなんて聲を出さずに遊ばしてくんねへよ。」と手を掴んだのは、逃さぬ要心。

「こんな物騒な處……」の一言は餘計M刑事の功名心を唆り立てた。「もう疑ふ餘地はない。」と突然執られた手先を力任せに振拂ふや否や、蛇と絡まる捕繩の早業！

「御用だつ、神妙にしろツ。」

「巫山戯た事を吐すな。そりや此方で言ふ事だ。」

始めて女装の男であつたのに氣が付いた此方の刑事、さりとは知

らずに女と見蔑つてゐた油断から、一步を先んせられて捕縄が手首に喰入る不慮の災難。

「やあ君も同じ仲間か、冗談ぢやない、此縄を取つてくれ。」と言つた、M刑事はいつかな捕縄を緩めない。

「其手は喰ふものか、斯うなりやもう此方の獲物だ、温厚しく繩にかゝつて了へつ。」

「莫迦々々しい、僕も刑事だよ。」の説明に、どうやら様子が變だと氣が付いたM刑事、それでも却々油断はしない。

「何？ 刑事だ、何署の刑事だ、證據があるなら出して見せろ。」

「出して見せるから、まあ此手を少し緩めてくれ給へ。」と漸く小手

の自由を許されて、腹掛の井から掴み出した名刺、燐寸を摺つて見て、

「やあ失敬々々、飛んだ感違ひして濟まなかつた。」

「感違ひはお互だが、僕の方が大分割が合はなかつたよ。」

「あはゝ。」

「あはゝ。」

□ 有難くない獲物

179
四年前の十一月、夜も晝も地震が頻々と絶へないので、忙がしい中に莞爾々々してゐた中央氣象臺の今村理學博士。

「此頃は大分獲物があるが、もしかすると此一週間の中にはもつと素晴らしい獲物があるかも知れない。」と物騒な事を言ひ出すので、新聞記者が気が気でなく、

「どうかそんな素晴らしい獲物は御免蒙りたいものですな。」と言ふと、

「御免を蒙りたいのは山々だが、獲物の方から押蒐けて来るのだから、これ計りは仕方がないよ。」

□ 摺合ひの傳染

「貴郎、今時分迄何處を蛇くつてゐたのです？」

「蛇くつてゐたとは非道ね、俺は蛇ぢやないよ、ちやんと二本の足で歩るいてゐたのさ。」

「歩るいてゐるのには時間があります。泥棒ぢやあるまいし、此夜更をのさく歩いてゐる人がありますか。」

「ありますかと言つたつて此御當人が現にのさく歩るいて歸つて来たのだから、これ程慥かな證據はあるまい。偶には交際だ、夜遅くなる事もある。それを和女のやうにさう頭からがみく怒鳴られると、聊か心中穏かならずだね。」

「何時私がかみく怒鳴りました？」

「それく、其調子がさうだ。」

「大きい聲は地聲です。」

「有難くない地聲だな、もう少しお手柔かに願ひ度ね、此夜更に近所に聞えても見つともよくないからな。」

「見つともよくない事を誰がさせるのです？」

「友達の交際ぢやあ仕方がないさ、いゝ加減に御冠を直して貰ひたいね。」

「何かと言ふとすぐ友達交際……貴郎のお友達はみんな夜々中迄方飲廻つてゐる人計りですね、さう言ふお友達なら絶交してお了ひなさい。」

「何につ、もう一度言つて見ろ、此方が下手に出れば好い氣になり

やがつて、勝手な熱を吹きやがる。絶交しろとは何だ、嫉くのも大抵にしろつ、男の交際を女が一々干渉する必要はない、黙つて引込んでゐろ。」

「いゝえ、引込んでゐられません、一家の主人が家を他處に夜々中迄遊び廻つてゐるのを黙つて見てゐて、それで家庭の平和が得られますか。貴郎は一家の平和を破壊して迄も友達交際が大切だと言ふのですか。」

「利いた風な事を吐すな。一家の平和を破壊するのは誰でもない爾自身だ。」

「おや何んですつて、私が何時家庭の平和を紊亂すやうな事をしま

した？私わたしはまた藝者げいしや狂くるひをして、家うちを外そとにするやうな真似まねはしませんよ。これでも一家いっかの主婦しゆふたる責任せきにんは充分じゆうぶん重んじてゐます。それだからこんな言いひたくない事ことも言いはなければならぬのです。』
 嫉やく責任せきにんなんか重おもんじてくれないで結構けつこうだ、そんな責任せきにんを重おもんじ過ぎるからつひ他處おもてへ出でて飲のみたくもなるのだ。女房にようばや嫉やく程亭主ほどていしゆ優遇もてもせずだ、狐色位きついろぐらみならだま我慢がまんも出で来るが備見きさまみたいに、眞まつ黒焦くろこけに嫉やき立たてられる亭主御難ていしゆごなんだ、腹はらも辰たつの口くちで遣切やりきれない。満潮時はんどきの正齋しやうさい腹見ふくみたいに、有難ありがたくない御面相ごめんさうを餘計よけい膨脹はうちやうさせるから堪たまつたもんぢやない。折角せつかく飲のんだ酒さけも備きさまの面つらを見みるとすぐ醒さめて了しまふ。』

『どうせさうでせうよ。私わたしは藝者げいしや見みたいに貴郎あなたの御機嫌ごきげんを取とる事ことは出で来きませんからね。はい満潮時はんどきの腹ふくです、有難ありがたくない御面相ごめんさうです。そんなに可厭いやなら何故妻ななつまにしたのです、私わたしの方ほうから是非ぜひ娶めとつてくれると貴郎あなたに頼たのんだ譯わけぢやありませんよ、貴郎あなたの方ほうから媒人ひとを立たて、是非妻ぜひつまに欲ほしいと申まを込んだのぢやありませんか、それを今いまになつて……』

『え、蒼蠅うるさいつ、そんなお浚さらひは聞ききたくもない、成程なるほど其時分そのじぶんには、一寸下膨ちよつとやもがくれで愛嬌あいけうのある女をんなだと思おもつてゐたが、ニヨキくと額ひたひの兩側りやうわきに下膨しもがくれが發展はつてんして來きちや實際じつさいお座ざが覺さめて了しまはあ、眞逆まぎゃくこんな嫉妬やきて女にようばぢやあるまいと女房にようばにする氣きにもなつたが、娶めとつて見みて

イヤハヤ恐入つたよ。血相變へてガミ／＼怒鳴られる度に壽命が三年宛も縮まる。だから遂に茶屋酒でも飲んで生命の洗濯も偶にしなければ、此身體が續かない。飛んだ厄介者、背負込んで今ではつく／＼後悔の體だ。」

「口惜しいッ、よくもそんな事をノメ／＼と言へますね、厄介者とは何んです、後悔とは何んです？」

「厄介者とは和女の事で、後悔とは俺の事さ、口惜しいと思つたら、嫉くのを止めるのがいゝよ。」

「止めたくつても止められませんよ、何處の馬の骨だか牛の骨だか知れない藝者風情に見替へられて黙つてゐられるかゝられないか

考へて御覽なさい。これが嫉かすにゐられますか、疾くのが至當です、嫉かれるのが嫌なら、夜々中迄遊び廻る友達交際は止めてお了ひなさい。」

「大きにお世話だ、そんな事迄一々女房の指圖を受けて堪るものか、引込んでゐろ。」

「引込んでゐられませんよ。引込んでゐては妻の責任を果たせません。」

「果してくれなくつても澤山だ、果されて有難迷惑だ、そんな責任なんか果すよりは、唯何んでもハイ／＼と言つてゐれば無事平穩に済むのだ。」

「私は貴郎の奴隷ぢやありません、貴郎に貴郎の権利があれば私には私の……」

「もう澤山だ、権利だの義務だのと生意氣な口を利くより亭主に嫌はれないやうに要心しろつ。」

「嫌はれても構ひません、どうせ私は満潮時の鰻です、そんなに可厭なら何故妻にしたのです。」

「又かつ、執拗い奴だ、好い加減にしろつ。」

「好い加減に出来ません、小便臭い藝者に夢中になつて家を忘れるやうな……」

「黙れつたら黙まらないかッ。」

「黙れません。」

「黙れないつ……？」

「黙るもんですか。」

「何につ。」

それから先きはドタンバタン。

「口惜しい、さあ殺すなら殺せつ。」

晝でさへ静かな大久保の町外れ、寢静またつ真夜中だから、生垣一つ隔てた隣家では、此活劇が手に取るやうに聞える。

「おい、隣家では又始めたせ、殺せくはちと穩かでないな、けれどあゝ毎日ちやあ耳に蜻で此方が驚かなくなつて了つたよ。」

「驚かなくなつたはい、けれど、毎晩々々組討をやられては近所隣家が迷惑だわよ。」

「眞實だ、近所に瀬戸物屋がない丈目付物さ。あんなに嫉く妻君もないもんだが、あゝ迄嫉かれる亭主は果報だよ。」

「おや、貴郎は變な事を仰るわね、何故あんなに嫉かれる亭主が果報なのです？」

「でもさ、亭主を取られては大變だと思ふから、少しでも歸りが遅いと嫉きたくなるのだ、つまり亭主を後生大切と思ふからさ。處が和女は俺がいくら夜遅く歸つて來ても少しも嫉かないで平氣でゐる。俺は何んだか物足りない。偶には隣家の細君の半分位でも

嫉いて貰ひたいね。」

「莫迦仰しやい、嫉く理由もないのに嫉かれますか、貴郎がそんなに嫉かれないなら、少しは私に嫉かれるやうな眞似をして御覽なさい。」

「嫉かれる眞似つて一體どんな事をすればいいのだ？」

「そんな事を言ふやうぢや嫉きたくつても嫉かれませんが、隣家の書家さんを御覽なさい。何時も身装を崩さず絹物づくめ、男振もよし、働きもあるし、何處へ行つても女に好かれさうな人でせう、だから奥さんも心配するのですわ、貴郎見たいに、年が年中ピイ〜風車で、女房に襟垢の付かぬ着物一枚買つてくれる事も出來

ない意氣地なしでは、何處へ行つたつて女に好かれる心配はないから、嫉きたくつても嫉かれないじやありませんか。』

「何つ、意氣地なしだ……？言ふに事を替へて亭主を意氣地なしとは何んて言草だ。』

「だつて働きがなければ意氣地なしぢやありませんか、こんな事言はれて口惜しいと思つたら、女房を嫉かせるやうな働きをして御覽なさい。いくら貴郎が齒ざしり噛んでも藝者に惚れられる人相ぢやありませんからね。一體文士なんか言ふ人は昔しから貧乏者の代名詞になつてゐて、女房泣かせの稼業ですからね。』

「侮辱するなつ、貧乏者の代名詞とは何んだ、女房泣かせとは何だ、

巫山戯けた事を吐すと承知しないぞつ。』

「承知してもしないでも、實際ですから仕方がないでせう。私は貴郎の家へ来てから、まだ一枚だつて着物らしい着物を買つて貰つた覚えはありませんよ、買つて貰ふ處が持つて来た着物をみんな失されて了ひましたよ。第一明日の支拂ひはどうする積りなので、私は宛然借金の言譯に雇はれて来たやうなものです、偶には借金の苦勞なしに、胸倉でも掴まへて、貴郎何處遊んでゐました？つて吞氣らしく嫉いても見たいのですが、肝腎な貴郎が意氣地なしで、ちつとも嫉かせるやうな働きの出来な印ですもの、私はつくぐと隣家の奥さんが羨ましいわ。』

「苟にも夫を掴まへて意氣地なしとは何んだ？莫迦にするのも放圖があるぞ。」

「苟にも夫なら、借着でもいゝから隣家の奥さん見たいな身姿をさせて下さい。年が年中北國の雷様では情けなくつて死にたくありませんよ。」

「死にたくば勝手に死ね、爾なんか何時死んでも惜しくはない。」

「死ねと言ふなら何時でも死んで見せますが、もし私が死んだら、明日から誰が借金の言譯をします？大きな事を仰しやるな。」

「此奴、何んて言ふと借金々々と大きな聲をしやがる、近所に聞えて見つともないと思はないか。」

見つともないと思つたら、女房に借金の言譯なんかさせないやうにおしなさい。私は格子の開く度に又借金取りかと思つて、びく／＼してゐますよ。」

「まだ吐すか、借金で首を取られた例しはないから安心しろつ、何んて言ふと二言目にはすぐ借金々々。愚痴も聞飽きて耳に蝸が出た。借金が恐くつて世の中が渡られるか莫迦奴つ。」

「貴郎はお俐口ですよ、後生ですから明日から借金取りに言譯して下さい。筆の先で豪らさうな事を書く半分でも出来たら大した大したもんです、私は泌々今の自分が情けなくなつて、實家へ行く度によく妹に言聞かせてゐます、私に懲りてもう決して文士なん

て人の處とこに嫁よめに行く無分別むぶんべつな考かんがへを起おこしてないつて……」

「こらつ、もう一遍言べんつて見みろ、容ゆるるさんから……」

「何度なんどでも言いひますよ、決して文士ぶんしの處ところに嫁よめかうなんて無分別むぶんべつな……」

「失敬しつげいなつ、まだ吐くかすかつ。」

「おやつ、殴ぶちましたね、働まきもない癖くせに女房にようばを殴ぶつ丈だけは一人前にんまへです。ね。さあもつとお殴ぶちなさいつ、誰だれが負まけてゐるもんか。」

「此奴こいつ、よくも俺おれに枕まくらを打ぶつけやがつたな、巫山ふざん戯げた真似まねをするかつ。」

夫婦喧嘩ふうふけんかの傳染でんせん、隣家となりに負まけずにドタンバタン。

「おいつ、静じやうかにしろ、隣家となりでも始はじめたやうぢやないか。真逆まがひ々々々々しい佃きさまが種たねを蒔まくから、こんな事ことになるんだ、嫉あくのも大槪たいがいにしろ。」

「だつて貴郎あなたが悪わるいんですもの、あら隣家となりでは大變たいへんね、どうしたつて言いふのでせう？」

火元ひもとは立廻たちまはり疲つかれで一息ひときついてゐる最中さいちゆう、飛火とびひの火ひの手てが熾さかんになつたので、芽出度めでたく仲直なかなほり、

「おい、隣家となりぢや猛烈まうれつに組討くみうちをやつてゐるやうだせ、あの温厚おごなしさうな細君さいくん、見懸みかけによらず却々なかくま負まけてゐないな、おやつ、隣家となりの書家あかきさんのやうに私わたしを嫉あかせるやうな働はたらきをして御覽ごらんなさいつ

て……俺の事を言つてゐるよ。』

「あらつ、私の事も言つてゐるわ、隣家の細君のやうに亭主の身を思つて嫉いて見ろつて……」

「おい！」

「貴郎！」

「恥かしいな。」

「極りが悪いわね。」

「どうしたらよからう？」

「どうしたらいゝでせう？」

「真逆種を蒔いた此方が黙つてゐられずさ。」

「と言つて止めに行くのも變ですわ。」

「仕方がない、此處から聲を蒐げよう、もしくつ、飛んだ人騒がせをやつて済みません、僕達が悪いのですから、どうかお互に勘辨して仲直りして下さい。」

椽の雨戸を開けて隣家の庭に吹き込んだ休戦喇叭。

「さあ殺すとも生かす……おやつ隣家から……貴郎、まあ其手を放して下さい、隣家で何か言つてゐるぢやありませんか。」

「うん、仲直りしてくれろつて……おい、此方の騒ぎが先方に聞えて喧嘩の仲裁に出て来たのだ、もう止せよ、見つともない、隣家の喧嘩は何時の間にか済んで了つてゐらあな。」

「あらどうしたらいいでせう、私明日になつて隣家の奥さんに顔見られるのが恥かしいわ。貴郎、何んとか言つて下さい。」

「弱るな。仕方がない禮を言はうよ。」

同じやうに椽の雨戸を開けて、

「いやどうも恐縮、遂其何が何んで飛んだ御手数懸けて濟ません。」

これは實話である。隣同志の書家と文士の姓名は暫らく預つて置く。

□ 閑暇があつたら勉強せい

先年、鹿兒島出身の帝大學生三人が、權兵衛伯を訪問して、攀龍

の端緒と頼んで置く下心、應接間に通されて、暫らく待つてゐると、例のヌーボー式で出て来た伯、好い鹽梅に面接を許されたので三人は大喜び、

「幸ひ今日は閑暇がありましたからお伺ひ致しました。」と言ふと、伯は眉をキリツと顰めながら、

「何つ、閑暇があつた？ 閑暇があるなら人を訪問して時間を潰すよりは勉強する方がいい。」

□ 頓智の名答

上野の精養軒で、東京府と埼玉縣と聯合治水會の協議をした事が

あつた。其時の原案には『東京埼玉治水會』とあつたを、埼玉の一委員が、

「川は上から下に流れるもので、埼玉は川上、東京は川下だから、此會名は埼玉東京治水會としなければならない。」と要らない處へ理屈を付けて愚圖り出した。すると莞爾と笑つた座長齋藤孝治君。一應は御尤であるが、元來治水と言ふものは、川下から順次川上へと溯つて浚ふものであるから、これは矢張原案通り東京埼玉治水會と名づける方がいゝでせう。」と天晴頓智の名答には満場拍手大喝采。

□ どううか日本語で……

鮪を詰めるやうな電車の混雑、歳暮時の鮭のやうに釣革にぶら下つてゐた一西洋人、丁度其前面に腰を掛けてゐたのが、私立の學生であつた。

「何卒！」と席を譲つて公德心を見せびらかすのも、實は英語を知つてゐるとの廣告から……。

「有難う！」と大いに感謝の意を表した外人に言ふよりは、寧ろ車中一同に聞かせたい風に、
「どう致しまして……」

とそれから

「貴方は何處迄？」とか何んとか親切氣の安賣を端緒に、語學の盛んに素養を振撒いて、大いに得意であつたが、肝腎の話對手たる外人、破格の英語を續發されて少からず頭痛の體、幾度か、

「何です、何？」を繰返して大弱らされ、遂には我慢が仕切れなくなつたと見え、

「貴方の英語私には分かりません、どうか日本語で言つて下さい！」

此外人永く日本に滞在してゐるらしく私立大學生の破格な英語は迎も足許にも及ばぬ程の明晰な日本語。

ギヤフンと參つて了つた學生、車中の人達から、

「あはゝゝ」と笑はれる氣恥かしさに居堪まらず狐鼠々と混雜を押し分けて、

「お危うございます。」と車掌の注意を他所に、飛降の藝當、敷石の水が凍つてゐたので、まんまと靴を走べらしてスツテンコロリ、車中の人達は再び

「あはゝゝ。」

電燈反射

寺内前首相が、官邸へ實業家連中を招待した事があつた、折柄列

席の兒玉翰長の許へ一通の電報が来た。新米の給仕君、手渡ししよ
うにも、肝腎の顔をまだ見知らない、據なく秘書官に訊くと、
「それ彼處にゐる頭の禿げた人がさうだ。」との事に、給仕君恭し
く電報を捧げて、

「頭の禿げたお方との事ですが……」

折も折運悪く兒玉翰長の前に着席してゐたのが、これ又燦々たる
電燈反射の末延道成君。

給仕君面喰つて、御兩人の頭を見比べながら、

「何方のお方がさうなのでせう？」

満場クスく、御兩人も仕方なしの苦笑、ツルリと頭を撫でなが

ら、顔見合せて、

「成程な。」はよかつた。

□ 泥棒に佛國式

黒岩周六君の鎌倉の別荘に、泥棒が忍び込んだ事があつたが、其
原因が奈何にも面白い。

同君常々風變りな事が好きで、夜間雨戸は愚か、戸障子全部明つ
放して、おまけに電燈迄煌々と點火つ放し、

「さあどうぞ御遠慮なくお這入り下さい、お望みの品物は何んでも
御随意にお持歸りなさい。」と言はぬ計り。然して同君これに註を

加へて曰く、

「これが其佛國式なのだ、斯うすると泥棒の奴却つて不氣味で這入れないもんだ。」と得々と説明してゐると、佛國式開業以來の三晩目にしてやられた。

「佛國式も根つから効力がありませんね。」と言はれた周六君、頭を搔ながら、

「まだ日本の泥棒には、佛國式は判らんと見える。」と遂に開放主義は其晩から撤回。

□五九郎が氣苦勞

一寸お邪魔を致します。」と突然大聲を張上げて、嘘八百口から出任かせの能書を並べ立て、古繪葉書や、ガラクタ玩具などを一束十錢で賣付る香具師が、列車や汽船(重に一錢蒸汽船)にゐるのは、讀者諸君も知つてゐやう。

『法令館』とは彼等に附けた名で、以前大阪で『法令館』と言ふ本屋からの發行された赤本を、これ等の香具師が、列車や一錢蒸汽船で例の呼賣をやつたからの名で、今ではこれが通り名になつて了つてゐる。

其香具師に聞くと、一番よく賣れるのは、大阪高槻間、それから米原京都間で、東京附近の東海道線は、乗客がてんで對手になつて

くれない程、智識階級が進歩してゐるさうである。けれど東北線の客種には、田吾連が多いので、日暮里大宮間の列車中には、花時になると、

「一寸御邪魔を致します」が盛んに賣残りの古雑誌や古繪葉書を、乗客に賣付けてゐる。それでも到底大阪高槻間の賣上げは見られないさうで、東京附近では列車内よりは花時分の一錢蒸汽船の方が利益を多く得られるとの事。

一體此稼業は列車條例に據つて嚴禁されてゐるので、もし車掌に發見された場合には容捨なく科料處分に附するのである。だから東海道線のポギー車のやうに列車内の通路が、貫通してゐると、何時

車掌にやつて來られるか分らない危険があるので、車臺の前後に一名宛の見張を立てて、それから口上を並べ始める。乗客の迷惑たるや蓋し一通りや二通りではない。嬰兒の睡眠は妨げられるし、談話は遮ぎられて了ふし、遂腹立紛れに、

「え、蒼蠅いつ。』なんて吐かうものなら大變、得たり賢しですぐ喧嘩を賣付ける。さうして乗客が下車のを待つて、

「先刻はよくも不吉を付けやがつたな。」と腕力に訴へて、其揚句はやれ藥代だとか、治療代とか言つて金を強請る。爲に鐵道院では、警戒おさく、怠りなく、絶えず常務車掌を見廻らせてゐる。車掌の方も彼等の方も、再三や再四の段でないから、お互に顔はよく見知

つてゐるが、奈何せん現場を發見した時でない、賃金を拂つて乗車してゐる客であるから、無暗と下車を迫る譯にも行かない。それで少し眼を離すと、僅かの間を利用して、すぐ

「一寸御邪魔を……」とおつ始める。ために往々列車内で車掌と大立廻りを演じる事もある。

面白からぬ『法令館』の説明は此位にして置いて、さて時は何時頃だつたか確とした記憶はないが、或る日東京驛から、素敵な美人同伴で、得々と神戸行の一等室に乗込んだ一紳士。外套の羽を煽ると、帯には金鎖、指には寶石入の指環、數には洩れない成金仲間だらうと、他の乗客が内々羨望を視線を注いでゐたのは、強ち其成金扮装

ではない、駿馬痴漢を乗せる柄にない御面相で、美人同伴の小癩からであつた。

すると乗客専務の車掌が何心なく一等室を通り抜けやうとして、ふと此紳士の顔を見た。

「いや、暫らくだつたね、どうだい此頃は、大分評判がいゝぢやないか。」と宛然友達の肩でも叩きながら聲を蒐けるやうな口吻。

車中の手前、面目玉を潰されて、思はず冷つとした紳士、身装に對し且同伴の美人に對し、

「やあ君だつたか。」とも言へない苦境、詮方なしに白らを切つて、「失敬ナ、僕は君達から聲を蒐けられる覚えはないよ。」と俯目にな

つて了つたのも、顔を覗かれぬ苦心慘愴、が何條慧眼なる車掌の眼を免かれ得やう、

「おい、可厭にお高く止るね。此頃少し賣出したかと思つてお體裁振るなよ。どうだい昔話しでもしやうぢやないか。」

益々檻樓が出さうになるので、氣が氣でない紳士、

「何んだか君は人違ひしてゐるやうだが、まあ彼方へ行つて様子を訊かう。」

「人違ひ？眞逆君の顔を見違へるやうな毫碌はしないよ、隠したつて駄目だ、君は以前……」

其先を言はれたら舊惡露顯、眼を白黒させながら、矢庭に車掌の

手を執つて、

「此處で話も出来まい、彼方へ行つて詳しい様子を訊かう。」と無理矢理に、一等室から連出して了つた。怪訝の眼を睜つて、後姿を見送る他の乗客、

「眞逆彼奴は拘摸でもなからう。」

同伴の美人も事態容易ならずと氣が氣でなく、泣聲出して、

「貴郎や、どうしたの？」とあはれこれも素性が出て了ふ。

此紳士こそ誰あらう、淺草公園の金龍館で、齒の浮くやうな大阪辯、人間離れの御面相を振廻し、糠味憎臭いお三連や、肥料臭い田吾連をキヤツくと笑はせてゐる低級喜劇の大達者曾我廼家五九郎

で、今日しも馴染の藝妓を連れ、誰知る者もなからうと俄作りの成金紳士、大阪乗込の途中とございであつた。

天網恢々疎にして洩らさず、此秘密を目敏く観破した専務車掌、今でこそ喜劇役者の片割と何喰はぬ顔をしてゐるが、彼奴の前身は東海道線の専務車掌連や列車給仕達、乃至成田線の古い車掌なら、みんな顔馴染の『法令館』!

『おい、場席が場席で、顔から火が出たよ。後生だから昔の事は秘密々々。』と食堂車へ拉し來つて、當の車掌から列車給仕連に至るまで、二枚宛の洋食の散財、舞臺で演るより此方が餘程面白い喜劇であつた。

□ 高橋博士の隠し藝

酒豪と言ふ程の量はないが、酔へば酔ふ程愛嬌のある高橋作衛博士が、一昨年長野縣人懇親會の席上、圖武六以上の上機嫌、座敷の中央に突立ち上り、而も頗る眞面目の態度で、

『諸君!。我々の郷里長野縣からは、昔佐久間象山、雷電爲右衛門を出したが、今や天下の名女優松井須磨子を出して、郷黨の爲に氣を吐いてゐる。其處で今私にこれから須磨子の假聲を演つて諸君のお聴きに達します。』との前觸れ、柄にない博士の隠し藝、ノラかマダダか、乃至はサロメの臺辭かと、耳を欬てゝゐると、聽

て唄ひ出したのは、

「カチューンヤ可愛や別れの辛らさ……」

噫其須磨子も、今では抱月と蓮臺座乗込の新婚旅行に上つて了つた。

□横取り智

「箱根蔦屋で待つ、山本。」と東京停車場の乗客用告知板に書かれてある白堊の跡を見て、

「おやつ、鎌倉行の約束が箱根になつて了つたのか、奴急に温女気分を思ひ出したと見える哩、まあ何方でもいゝ、今日は大いに管

を捲いて奴に介抱させてやるぞ。」と呟いた帝大工科のS君、忙て切符を買つて國府津行に乗込んだ。

試験の成績も八十點以上、在學中三菱から招聘を懸けられた秀才、二三日頭腦の休養に山本と言ふ友達を誘つて鎌倉行の約束を極めて置いたが、當日止むない急用で一汽車遅れる事になつたが、先方で待合せる處は停車場の告知板に書いて置く筈、

「箱根蔦屋で待つ。」と急に目的地は變更してあつたが、何疑ふ處もないと、さてこそ跡追蒐けた始末。

國府津で電車に乗替へて着いたのが湯本。親譲りの膝栗毛に一鞭くれて、底倉迄の上りを一息にテクつて、聞かすとも知れた蔦屋の

立關先^{びんくわんさき}

「おい山本と言ふ男は來てゐるだらう!?」と早や靴を脱ぎかける氣の短かさ。

「はい先程からお待兼で……」

「さうだらうと思つて急いでやつて來たのだ、さあ君案内し給へ。」

「はい、一寸お伺ひして参りますから……」と忙て、廊下傳ひを引込んで行つた女中の一人、聽て又出て來て恭しく、

「さあどうぞ此方へ……」

斯くあるべき筈と大手を振つて女中の後に續いた。長廊下を右に曲り左に折れて立派な奥座敷、

「此室でございます。」と障子を開けられて、思はず逡巡り、

「おやつ。」と口を突いて出た驚異の叫び、それも道理、室内の中には浴衣懸の山本が、自分の來るのを待兼顔に、寢反りながら新聞でも讀んでゐるだらうと思ひの外、福相な半白の老紳士が、夫人と覺しき女と火鉢を中に對座、夫人の傍に慎ましやかに俯目なつてゐるのは、花恥かしき窈窕な美人、まだ二十には手の届かぬ令嬢!

「さあずつと遠慮なく……」と老紳士から聲を蒐けられて、S君少からず面喰つた。

「おい、座敷が違やせんか、僕を待つてゐるのは山本と言ふ男だよ。」と女中を顧返つて二の足の體、女中の答辭より先きに其老紳士、

「山本は眞逆貴方が斯ふ早く來やうとは思はるので、箱根は始めてだとかで、瀧の方を見物してくると出蒐けましたよ。あは、彼も氣短のやうな呑氣な男さ。さう遠慮せずにつつと此方へ……、山本が居んでも話は出來ますわ、彼が戻つて來たら一つ驚かしてやるのも一興、おい／＼和女達も何を茫乎してゐるのだ、早く茶でも煎れないか。」と莞爾々々しながら氣輕な言葉、

「ほんに氣が付きませんで……さあ貴方、さうお固くなつてゐては此方が困ります、お洋服はお窮屈でせうから、どうぞお樂に……」と夫人迄がチャホヤの優遇、縮緬の座蒲團を出すやら、菓子を勧めるやら……、

俯目になつて嬌羞の色を漂はしてゐた令嬢、親母の蔭からそつと上目遣ひにS君の顔を見上げたが、其瞳には隠されぬ嬉しさに輝いた。それと見て取つた老紳士夫妻は餘計ホク／＼、

「和歌子や、山本さんからお話のあつたお方だよ、御挨拶をしないかい。」と母親に言はれて、三つ指の淑やかさ、口の中であるかなさかの聲、

「始めまして……」

狐に魅まれた心地、此お茶が尿水で、此菓子が馬糞ぢやないかと、我膝をキュツと抓つて見ると正に痛い。

「いや申遅れました、僕は……」と身を退つて挨拶しやうとするS

君を忙て、止めて老紳士、

「いや御挨拶は一切抜きにして貰ひませうわ、どうも四角張ると面白話も出んからな。貴方のお噂は山本から始終聞いてゐますよ。今日は御緩くり裕いて貰ひたい、其中には山本も戻つて來ませうから……」とまた障子の外に命令を俟つてゐた女中に、

「おい急いで酒の支度しろ。」

無我夢中薩張理由は判らないが、此老紳士の口吻で察するに、山本々々と呼捨にする鹽梅が、奈何にも目上の親戚關係らしく思はれる。嘗つて山本が、

「僕の伯父は知事の古手で、目下は國へ隠居してゐる。」と言つた伯

父さんなる人が多分此人だらうと思ひ浮んだS君、

「奴、鎌倉行を急に箱根に変更したのも、つまり此美人を僕に見せ付けてやらうの下心だな、こりや一杯喰つたぞ、斯うなりやよし度胸を定めて山本の居ないが幸ひ、大いに氣焰を吐てやらう！」と急に態度一變、

「ぢやあ失敬しませうか。」と大安座。女中が運ぶ杯盤に、斗酒尙辭せずの遠慮拋棄、

「奈何です、お風呂へ行らしつて、御窮屈なお洋服をお召替になつたら……」と勧める夫人の親切も、

「何かに學生は結句此方が氣樂です。今日は大いに山本君の介抱を

受けやうと思つてやつて来たのです、遠慮なしに飲みますよ。』と
 それで伯父さんの手前、山本々々を振廻す事は遠慮して君の字の追
 加、其磊落な態度が更に又氣に入つて了つた老紳士夫妻、顔の相好
 を崩しながら、

「結構々々、内輪同士で遠慮は禁物、大いに酔つて貰ひますぞ、俺
 も大いに酔つて見る。山本が介抱せんでも、貴方の介抱は娘に命
 令しませうわ、わつはゝゝ。』

「あら貴郎、まだ先方さんから御思召も判らないのにそんな事仰し
 やつて……」

「何いゝさ、否應なしに押付けて了ふわ。』

「さうは行きませんよ。此縁談計りはよくお互同士の……」などゝ
 そろゝ酔の廻つたS君の耳には何が何とも判断の付かない事を囁
 き合つては、時々S君と令嬢の顔を見比べては嬉しさうに笑つてゐ
 たが、

「來年は高等文官の試験でも受けなさるのですな。』と改まつてS君
 に老紳士が訊ねた。

「高等文官試験……? 僕は工科です、體のいゝ鍛冶屋職工で、まあ
 學校でも卒業したら、何處かの會社へでも入社らうと思つてゐま
 す、尤も三菱の鑛山部から來てくれるの招聘はありますが、さて
 どうしますか卒業て見た上でなくつては分りませんよ。』

「やさうですか、山本の如何を言つてるのか、貴方は法科で來年卒業するなんて話して居つたが……」

「工科と法科のお聞き誤りでせう。」と御當人至つて平然たり矣である。

「或はさうぢやつたかも知れん。工科なら尙俺の方は望ましいのぢやて、實際高等文官試験に通過つてからも、世の中に名を知られる迄になるのは容易な事ぢやないからかう、それよりは着實な方面に發展する工科の方がどれ程頼母しいか知れんよ。今貴方の言つた鍛冶屋さんが大いに嬉しいね、おいしく和女達はどう思ふ？」

「それは私に訊くより和歌子にお聞きなされるのがいゝでせう。おほ

」

「成程な、こりや一本やられた哩、どうぢや和歌子、和女もお父さんと同感か。」

「え、」とS君の顔をそつと視線を投げた令嬢の聲は糸より細かつたが、偽らぬ同感の青春は唇の律に漂つてゐた。

「安心々々、さあ貴方、もつと酔つて貰はうかな。和歌子今からお酌の稽古して置けよ、あは。」

初對面の主客意氣投合して、飲む程に差す程、追がのS君もそろく室の中がくるく廻つてくるやうな氣がした時分、

「お蔭でいゝ保養して來ましたよ。」と言ひながら入つて來た男、

「こりやお客様ですか。」

「お客様もないものだ、自分が連れてくる答のお客様をすつばらかして何處遊び廻つてゐるのだ？、お客様の方が先刻からお待兼だ。」と老紳士に言はれて怪訝顔、

「お客様がお待兼？、まだ島田さんは来やしないでせう。」

「あれだ、おい山本、お前はどうかしてゐるな、お前の目の前に座つてゐるぢやないか。貴方……」とさも面白さうにS君に盃を差しながら、

「山本がどうかしてゐる。貴方の姿が目に入らんと見える哩。」

此言葉にはつと氣が付いたS君、いくら酔眼朦朧の時でも、新來

の見も知らぬ男と、親友の山本とを見違へる程酒に吞まれてはゐない。

「僕の友人はこんな人ぢやないです。」と簡短直截の明答、先方でも同じく、

「此お方とは私まで一度もお目に懸つた事がありません。」と來た。「あつ。」

「あつ。」と老紳士夫妻の驚きは更なり、今が今迄嬌羞の中に言ひ知れぬ嬉しさを隠しながら、白魚の指先で持ち馴れぬ酌までしてくれた令嬢、

「あらどうしませう？」の涙聲。

「こりやまあどうした事つた？」と呆れ蛙の面を揃へて、段々話合つて見ると、事の間違ひは停車場の告知板が原因、姓は同じであるが、S君の友人とは似ても似つかぬ新卒の四十男が、箱根で待合せる筈の島田と言ふ大學生に行先を告知して置いたのを、適つ切鎌倉行が急に變更したものと思ひ詰めたS君、此老紳士も亦山本と言ふ男から、此處へ訪ねてくる大學生のある事を承知の上で待合せてゐた折柄、山本の姓を呼んでS君が押蒐けて來たから、早合點と知れた。

「いや何んとも申譯はありません。」と飲んだ酒の酔も急に醒めて了つたS君が繰返し／＼疎忽を謝すと、

「それはお互の事ですが……」と夫人と顔見合せながらさも残り惜しさうに、

「これも何かの御縁でせう。俺は斯ふ言ふ者、これからはちよいちよいお遊びにお出でなさい。」と言つて名刺を出されると、S君も宿所氏名を名乗らない譯には行かなくなつて、

「僕は御覽の通りの學生で下宿住ひ、何れお詫には必ずお伺ひしますから、今日の處は御勘辨を願ひます。それにこんな間違ひがあつたとは知らずに、友達が鎌倉で僕を待草臥れてゐるでせうから、これで失敬を致します。」

體のいゝ喰逃げを極込んで、権現様の奥の手を利用、禮やら詫や

ら譯の分らぬ挨拶を残して鳶屋を飛出し、

『道理で様子が變だつた。』

湯本から逆戻り、大船で乗替へて鎌倉に馳付けたのは其日の薄暮、漸くの事で友達の宿を訪ねて、右の顛末を落もなく話すると、呆れ返つて曰く、

『君は美人の一酌で美味い酒を飲んだのだから愚痴言ふ處はないが、欠伸計り嚙殺してゐて唯一人ぼつねんと待草臥れた僕の身にもなつて見ろよ。』

話はこれで鼻にはならない。

『東京へ歸つたら屹度お伺ひ致します。』と箱根を逃出す時の言質な

んどはすつかり忘れて了つたS君、相不變汲々乎として勉強してゐた。

それから一月計り經つた或日、何等の豫報をなく故國から突然上京して來た母堂、

『お母つさんもお人が悪い、一寸電報でも打つて下すつたら停車場位迎ひに行きますのに……』と言ふS君の顔を嬉しさうに眺めて、

『さう言はれるだらうとは思つてゐたが、今度は思ひ懸けない急用が出来て、お父様に代つて私が上京て來た始末さ、偶にはお前を驚かせるのもよからうとお父様の吩咐でね、おほゝゝ。』

「ぢやあお父様と共謀ですな、益々以て人が悪い、處で其急用と言ふのは一體どんな事なのです？」

「おほ、何もさう心配する用向ぢやないよ、實は何を隠さうお芽出度の相談が降つて湧いたもんだから、一應はお前の考へも聞きたいと思つてさ。」

「へえ、お芽出度の相談……それに僕の考へを聞きたい……？何が何やら薩張意味が分りませんな。」

「さうだらうね、藪から棒にこんな事を言出したら、嗚お前は吃驚するだらうが、其お芽出度の相談と言ふのはね、他でもないお前の縁談さ、お前に嫁を貰ふ相談なのだよ。」

「じよく冗談言つちやあ困りますな、當人の僕が何にも知らない中に……」

「だから一應お前の意志も聞いた上で、先方に返事をしようと思つて、お父様の代理で上京して來たのですよ。」

呆氣に取られたS君、段々と様子を訊いて見ると斯うである。

實は國許で藪から棒の縁談なのだ。先方は東京で知名の實業家、其一人娘を是非娶つてくれると人を以ての縁談、

「悴はまだ在學中ですから……」と一應は斷つたが、それは素より承知、今が今すぐと言ふ譯ではなく、卒業なすつてから式は擧げるとしてお約束丈定めて貰ひたいと強つての申込、結局それからそれ

と話は進んで、

「それ程の思召なら一應忝の意嚮も聞いて見た上で御返事申しませう。」となつて、急に出京する事になつた。

「と言ふ譯で萬事お父様に代理つて出て來たのさ。寢耳に水で嘸吃驚したらうが、決して悪くは計はないから私達に任かせてくれまいか。」と附足した。

「そりやお母さんにお任せしてよろしいですが、全く寢耳に水で、何が何やら當人の僕には薩張様子が分かりませんよ、それに僕はまだ在學中で、今が今迄夢にも妻帯問題など頭腦に浮べた事もないし、實際學校の勉強の方が忙がしくつて、女房探しの暇もない

位、

よあそんな縁談は學校を卒業てからにして貰ひたいのですが……。」と時機尙早論を唱へて反對はしたものの、母堂の切なる勸誘を一概に拒絶も出來ない羽目になつた揚句が、

「それぢや宜しうございます、一切を御兩親にお任せ致します。けれどお母つさんが娶ふ嫁ぢやないから、當人の私に妻帯の條件を撰擇させて下さい。先づ第一は僕が學校を卒業て一家の獨立生活が出来るやうになつてからする事です。それから僕の女房たらんと欲する女はですな、須らく柔順羊の如くなるべし、さうして美人たるべしですな、あは、此條件を承知なら娶つてやつても差支ない、どうですお母さん、此條件を承知で嫁る美人の候補者が

「ありますかな。」と元來洒落なS君、人生の重大問題を至極無造作に取扱つてゐる。

「それ聞いて安心したよ。實はお前の意嚮を聞かない中は、先方へ確とした返事も出来ないで弱つてゐたが、何にしる先方が強つての懸望、それに寫真で見た其令嬢がお前の條件にお誂へだから、つひ乘氣にもなつて態々出京て來たやうな譯さ、では早速お前の條件を先方へさう言つて約束丈を極めて置ませう。おほ、お前は果報者だ、お嬢さんに見染められてさ。」と機嫌よく笑ふ顔がS君には縁談より嬉しいのであつた。

「お母さん、こんな僕でも見染める物好きな女があるのですかなあ、

一體何處の娘で何んと言ふ女です？、寫真があるなら一應拜顔の榮に接したいのですな。」とS君とて萬更木石ではない、將來自分の妻とする女の顔と名丈は聞いて置きたいのだ。が母堂は「ほ、ほ」と笑つて、

「まあ玉手箱の蓋は開けない中が楽しみさ。急かないで待つておいでよ、二三日中に直接御當人に遇はして上げるからね。」と名も教へてくれなければ、寫真も見せてくれない。

「仕方がない辛抱するかな、僕が氣に入らなかつたらお母さんが娶ふといふ。」

「莫迦お言ひな、こんなお婆さんを見染める女がありますか、おほ

』
母堂の機嫌のよいのがS君には何よりで、肝腎の結婚問題は二の次に、

「お母さん何か奢りませうかね、あは、考へて見ると矢張其金子はお父さんの懐から出るのだから、決して御遠慮には及びませんよ、あは、つは。」

翌一日隔いて母堂は、先方へ返事をして來ると出蒐けた。條件盲従か拒絶か、

「ベルサイユの聯盟會議も意外に永引くものだからな。」なんて當人至極呑氣なもの。

プ、ーと警笛を鳴らして下宿の門の前に停つたは自動車だ、

「はて此梁山泊連中へは自動車の客は來ない筈だが……」と思つてゐると、サラ／＼と廊下へ絹擦れの音、障子がざらりと開いて、

「お客様がゐらしつたよ。」と母堂を先きに這入つて來つたのは、これはしたり箱根で疎忽の失策を演じた時、見覚えある夫人と令嬢！
「日外は飛んだ失禮を……」との夫人の挨拶に續いて、恥かしさうに唇洩るゝ鶯の初音、

「不束者でございませうが……」

「あたふた居住直したS君、ドギマギしながら、

「僕こそ……お詫びに上がらうと思つてゐましたが、遂學校の方が

忙がしくつて……」

思ひ懸けない母堂の出京、思ひ懸けない縁談、更に又思懸けない人達に不思議の再會、夢に夢見る心地、後で母堂から詳しい様子を訊いて見ると、箱根の蔦屋で、山本と云ふ男の媒介に乗せられ、これも帝大在學中の秀才との觸込に見合ひの約束、それを飛んだ山本達ひでS君が飛込んだが、これが結局結ぶの縁となつて、御本尊の令嬢のみか、親達が恬淡磊落のS君に惚込んで了つて、あはれ後から乗込んで來た花婿候補者には、

「何れ考へてから……」と體のよい謝絶、それも無理はない、S君とは比較にならぬ御人體を他行行のお化粧で飾り立て來たのが却つ

て嫌氣の種を蒔いたのであつた。

「同じ嫁るならあゝ言ふ人に……」と見込まれたS君、學校の成績から平素の行狀迄、行届いた探索の手が廻つてゐるとはお釋迦様でも氣が付かなかつた。令嬢が不言不語の懇望に乘氣の馬力を加へた先方では、人を頼んでS君の國許へ直談判、其結果が不意に母堂の出京となつたのであつた。

「成程、それで様子は判つたが、おぢやんになつた先生の事を考へると、僕が何んだか横合から横奪したやうな氣がして濟まないなあ。」と言つてゐるが、美人は矢つ張美人に瞳へ映じると見え、別段此縁談に異議は唱へなかつたとある。芽出度しく。

寄附飛行

飛行協會の長岡外史將軍、大藏省へ寄附金募集に出蒐けて、

「飛行機を拵へるには金が要る。其基金だ遠慮せず寄附し給へ。」
と無理押附、

「應分の寄附はしますが、同じ高等官でも俸給の差がありますからな。」と或る一人が言ふと、外史將軍の曰くが振つてゐる。

「でも飛行機から下瞰すと、低い人も高い人も等しく黒一點だ、そこで此寄附金は官等の別なく、誰も彼も一樣に二圓宛と定めた。

さあ否應言はずに出し給へ。」と到頭高等官連中から捲上げて、

「左様なら。」と滑走!

寄附した連中、あんぐりと後見送つて、

「あの様子ではもう二三度此省へ着陸するかも知れないね。」

茶目の徹底

一昨々年の夏、沼津の松仙閣に一泊した後藤男、折柄滞在中の同姓幸太郎君を伴ひ、隣接せる賀田金三郎君の別荘へ態と勝手口から這入込み、自分は番頭幸太郎を主人に見せかけ、

「賀田さんも到頭事業に失敗して、別荘を賣るさうですから、御前お求めになつては……!?」と留守番に聞えよがし、断りもなくノ

「コ／＼上り込んで、家内隈なく掻き廻し、果ては便所迄開つ放して、其儘松仙閣に引揚げ、」

「あはつは。」と豪傑笑ひ、

「茶目もこゝ迄やらんければ徹底せんよ。」

□ ドンブリコ博士

御大典觀艦式の陪觀に出蒐けた片山國嘉博士、どうした拍子か、足踏外して艦艇から、ドンブリコと海中に落つこつたので乗合の連中大騒ぎ、漸やく土左衛門と改名しないで済んだが、其時博士引揚げに手傳つた代議士伊東知也君、後で残念さうに、

「彼の男なら助けてやるのぢやなかつたよ。」

「はて、どう言ふ理由で……？」と訊いて見ると、

「彼奴、平素酒飲の悪口計り言ひたがつてゐるぢやないか。」

これを耳にした博士、葉書に謝辭を並べた末、

我が命救ひたまひしお禮には

君を救はん酒の海より

落水庵蘇生道人

□ 足の改良

米國の東洋通信社長本田増次郎君、近來歐米で、

泰西文明の滅亡は、今後二百年を出でず。』との説があつて、而も正しく其傾向が見えるので、

『泰西文明の滅亡を濟ふのには、どうしても東洋文明の力を藉りなければならぬ。』と感じ、先づ儒教の本領から研究して見ようと、先年歸朝するや否や、直に故竹添井々居士を、國府津の隱宅に訪づれて、王道の講演を聞くと、居士は約四時間に亘つて諄々とやり出した。

八年も米國にゐて座つた事のない本田君、すつかりこれで足を痛くして了ひ、其晩から三日は按摩の御厄介、

『泰西文明の滅亡を濟ふのも必要だが、それより急務なのは、先づ

自分の足から濟ふ事だ。』と嘆いたげな。

茶目修行物語

茶目助は子供の時分から評判の悪戯者、或る夏の事、新聞を読みながらの團扇遣ひに疲れて、うとくと好い心地に晝寝してゐるお祖父さんの顔を、そつと覗き込んで、

『やあ大きな鼻の穴だな、何時もく煙草の煙計り吹てゐるから、孔中が油煙で眞黒けた、不精なお祖父さんは掃除した事がない。偶には煙突掃除したらよさうなものだ。』と天然煙突を凝乎と眺めてゐたが、廳て何を思ひ付いたのか、

お祖父さんがよく寝てゐる間に僕が煙突掃除をしてやらう、さうすれば屹度目を覺ましてから、御褒美をくれるだらう。」と珍案煙突掃除に取菟つた。觀世捻では奇麗に掃除が行届かないと、硯箱から持出して來た細筆、それにふと思付いたのは、姉さんが染浸抜きに用ふアンモニヤ水、着物の浸染が抜ける位なら、煙突の油煙掃除にも効能があらうと、栓を抜いてブンと刺激する臭氣を、自分の鼻を掴みながら、ドクリと付けて、お祖父さんの煙突へ遠慮なく突貫させたから堪らない。

「うわつ、ハクシヨイ、ゲイ〜、ハクシヨイ、ばゞ莫迦な惡戯をする奴は誰だつ、ゲイ〜、ハ、クシヨイ、胸が悪くなつて嘔

吐さうだ、早く金盃を持って來てくれ。此奴め〜、惡戯さにも程がある、もう今日は堪忍しないぞつ。」

藥罐頭からぼつ〜と湯氣を立てながらの權幕が何時もと違つた物凄さに、目的が外れて茶目助、狼狽て逃さうとする襟髪をむんずと引摺へて、

「此奴、何んて眞似をするのだつ。」と痛い〜御褒美が続けさまにポカリ〜。

これが丁度十歳の時、小學校から中學に進むに随つて、年齢と共に惡戯は益々烈しくなつて來た。

教師の靴をそつと引張出して、其中へ烏糞を塗り付けたら、帽

子の裏へ白堊の粉を塗抹つて置いたり、種々な奇智暗謀を回らして悦に入つてゐた。けれど此茶目助、素行にこそ始終零點以下であるが、學科は頭抜けてよく出来る、而もそれが他人のやうに頭腦を抱へて勉強するのではないから不思議、就中運動技にかけては、野球ござれ庭球ござれ蹴球ござれの一手專賣所、膝栗毛の速力に至つては、汽車と競争して見せんすの勢、柔道は講道館の黒帶、得意は刎腰と大外刈、悪戯はするが、感心な事には決して自分より弱い者には腕力を出さない。

中學四年の時である。學期試験に於ける物理の難問題に、隣近所の同窓が、頻りに腦頭を悩んでゐるのを見兼ねて、先生の後向いたを

幸ひ、素早く一小紙片に答案の走り書き、唾で手の甲にべたりと貼付け、ヌツと計り背後の學友全體へ廣告、さりとは知らぬ教師、向直つて見ると、茶目助が頻りに手を舉げてゐる。

『何か。』

『先生、僕はもう出來ました。』と腹の中で、

『どうだ、カンニングの新發明だらう！』

向陵生活に移つてからは、餘計蠻風を發展させて、短袴弊帽大道を濶歩、嚴冬白地の浴衣一枚で、往來中を扇使ひ、

『暑いな、氷水を飲ませる處はないか。』

嘗つて院線電車で乗客満員の大入、子供を背負つた老婆さんが混

雑に押されて、可愛想によるくしてゐるのを見兼ねて、

誰か座席を譲りさうなもの……！」と見廻す瞳に映つた女學生こそ運の盡き、

「妾は英話も讀めてよ。」とこれ見よがしに擴げてゐるのは、讀めるか讀めないかは疑問の英詩、覗き込んで突然、

「フ、ン。」と鼻で笑つた茶目助君、突如大聲上げて、

「あゝ臭い〜。」

「どうかなすつたのですか。」と傍人が驚いて訊ねると、

「見給へ、洒落臭いちやないか。横文字を讀む丈あつて、可厭に腰の横巾が廣いね。」

これぢやどんな厚顔ましい女學生でも居堪れない。席を立つて狐鼠々と混雑に紛れて逃出す後姿を見送りながら、

「イヨウ偉大な臀部だなあ、諸君押潰されないやうに注意し給へ。」と痛烈な嘲罵を浴せながら、子持のお老婆さんの手を執つて、

「さあ其處へお掛けなさい。」

お隣りの赤門を潜るやうになつてからも、成績は何時も八十點を下つた事がない。其癖ノートと首つ引の勉強を見せた事のないのが茶目助君の誇りとする處、片つ端から友達之處を荒し廻つては、

「おい君、勉強なんか止し給へ、大いに飲んで騒がうぢやないか。」此傳によつて或る時、友達の下宿に押蒐けると生憎外出の留守、

退屈紛れに机の抽出しを搔廻して見ると、ノートの中からバラリと落ちたは一枚の葉書、手に執つて讀下した文面に曰く、

時下春暖の砌御兩親様益々御多祥奉大賀候陳新毎々の事とて
嚙かし御立腹の事と存じ候處早速御送金下され御厚恩の程深く
感佩罷在候 銳意専心學業を勉勵海岳の御恩に酬ひん所存にて候
先は不取敢御送金到着の御禮迄

時節柄御尊體幾重にも御攝養下され度候

「奴、相變らず嘘八百を並べ立ゝは、藥罐頭を胡麻化しくさつてゐるな。親莫迦チャンリンとはよく言つたものだ、奴さんが飛んだ方面に勉勵する臨時軍費を唯々諾々として送つて寄こすとは知ら

ぬが佛だ。あはゝ、銳意専心が聞いて呆れる見て噴飯す哩。よし
／＼何か一工夫してあつと言はしてやるべい。」

持前の悪戯の虫が、むく／＼と頭を擡げて、何か奇抜な珍案でもないかと首を傾つた揚句、葉書の文句の行間に一々註を加へた。

早速御送り下され親莫迦の程舌を出して笑ひ申居候 銳意専心紅燈緑酒に勉勵海岳の御恩に背かん所存にて候……と迄はまだ悪戯の罪も浅いが、末尾に至つて、

時節柄流行感冒にて藥罐頭の寂滅を祈り申居り候……とは餘りに藥が利き過ぎてゐる。さうして其葉書をポストに投込んで、

「あつはゝ。」

超えて半月、眞つ赤になつて茶目助君の下宿へ逆襲に及んだ其先
生、

「おい君だらう、こんな悪戯をしたのは……？」と證據品の葉書を
突出しての詰問、争へぬは其筆蹟が、御當人至つて平然たり矣で、
「ウン僕さ。」と濟ましたもの。

「僕さもないもんだ、こんな悪戯をしたもんだから、國の親爺勃然
になつて怒り出し、商用序に上京して、突然何んにも言はず此
葉書を突付られた時には、僕も呆れ返つて言譯が出来なかつたぢ
やないか。悪戯にも程がある。こりや僕の知つた事ぢやない、友
達の中に悪戯者があつて、僕の知らぬ間にこんな莫迦な事を書散

らしたんだと言つて見たが、親爺却々承知しない、よしそれなら
ば其友達が悪戯したに相違ないと言ふ證據を持つて來い。書く事
變へて親に死んで了へとは何だ、お前の知つた事ではないと言ふ
證據を見せられなければ、今後一切學費は送つて遣らないと大變
な權幕だ、おい君此始末をどうしてくれるのだ。」

「そんな事はちつとも心配するに當らんぢやないか、解決易々たり
だ。これから君と一緒に往つて藥罐頭に詫びてやらう。親爺は君
の下宿に待つてゐるのかい。」

「僕が待たして置いたのだ、君から證明書を貰つて親爺の機嫌を直
させなくつては、僕の駄麩問題だからな。」と餘り呑々洒々圖々し

い茶目助の態度に度膽を抜かれ、屹相變へて襲撃して来た甲斐もなく、あはれ兜を脱いで敵に同情を仰ぐ逆様、

「さうか、薬鐘頭は僕の立證を待つてゐるのだな。面白い、時節柄湯氣を立たせて置くのも衛生によからうせ。」

「冗談ぢやない、何んとか君の工夫で親爺の機嫌の直るやうにしてくれ給へ。」

「造作もない事だ、よし僕が君と一緒に持つて、悪戯の詫びをしてやらう。」

「本實かい、さうしてくれ、ば親爺も安心するし、僕は太助かりだ、ぢやあ濟まないが一緒に来てくれ給へ、其代り晩には江知勝を奢

るからな。」

「ウンよし〜。」とノコ〜下宿に出張に及んで、

「貴方が〇〇君のお父さんですか、成程争へないもんだ。親子と言

ふものは斯うもよく似るものかなア。」とのつけの挨拶で相手の肺腑を抉つて、さてそれから、

「此葉書で大層御立腹ださうですが、全く本人がやつた事ではなく、僕がお父さんに對する厚意上やつた始末なのだから、まあ怒らずに堪辨して下さい。」

こんな詫言が世の中にあらうか、薬鐘頭の破壊を祈るのが厚意

……?

「巫山戯るのも好い加減にするがい、貴方は此年寄を玩弄にするのか。」と蒸氣の立かたが餘程烈しい。

「おい君、莫迦な事を言つて呉れちや困るぢやないか、啻さへ親爺は勃氣になつてゐる處だのに……、こんなら何を君に来て貰ふ必要はない。」とおろくする友達を流眼の一盼、向直つてきて、

「友の前途を思ふ友誼の赤誠が御親爺に判らないとは、所謂良薬は口に苦しの譬へ通りですな。よろしい僕が諧謔の諷刺に潜めた満腹の厚意を説明して上げませう！」と恐ろしく眞面目になつて咳一咳。

「〇〇君から聞けば、毎月お父さんから仰ぐ學資は五十圓、いくら

米價暴騰の今日だとして、學生の身分で五十圓の月俸取は分に過ぎてゐる。而もそれで足りないで時々臨時費を請求するのには、必ず何處かに拔道があるに違ひない、其費途に就ては僕敢て説明しないが、それが爲に〇〇君の身を誤まる事甚しい、僕はこれ迄随分忠告もしたけれど。〇〇君の耳には風馬牛だ。今學期などは全然試験を受けないぢやありませんか。これと言ふのも畢竟お父さんが親莫迦チャンリンを發揮して、忤の言ひなり放題に飛んだ勉強の資本を送金するから、忤が校門以外に突貫して了ふのです。此際學費を必要内に制限し、臨時費を拒絶して了つたら、〇〇君も止むなく眞面目に勉強するかも知れないと、態と僕が諷刺の惡

嘘を弄した譯、現在の〇〇君が眞意は、僕が附加へた最後の一句が其半面を語つてゐるのかも知れませんが。こんな親不孝の人間を拵へたのも、惑溺した貴方の盲目的愛情が其責任の一部分を背負なければなりませんよ。」と言續けて、今度は簞を突いて蛇を出した恨み面相物凄まじく今にも掴み蒐からうとする友達の頭をデロリと眺めながら、

「おい君、斯う言はれて口惜しいか、僕が悪戯の立證より、君がお父さんの愛情を無意味に濫費する立證を擧げてやらうか。口惜しかつたら性根を直して勉強せい、それとも腕力で來るなら遠慮は要らん、何時でも蒐つて來い、君一人ちや物足りないから助太刀

の五六人でも頼んでくるがい。」と腕を叩いて瘤々たる肉塊を叩いて見せる。

「いやようやく判明しました。忤の不心得は慥かに俺の責任でした哩、よく言つて下すつた。其葉書は今後忤を意見するのに無二の寶物、大切に俺が保存して置ませう。」と蒸氣の冷却した藥罐頭には、急に感謝の照が輝いた。

「やつ、お判明ですか。いや謹んで僕の無禮はお詫します。」

「こら忤つ！」と風雲一轉、

「今更俺は憫に叱言は言はないが、今後は△△さんの有難い忠告に服して性根を入替へる。それから念の爲に言つて置く、學費以外

に金の要る時があつたら、△△さんの証明を貰つた上でなければ、
 總一文でも送金しないぞ。」

「おやく〜。」と赤くなつた顔が青くなつて了つた。

「△△さん、俺から折入つてお願いします。もし今後倅に金子の要
 る事があつたら、貴方が一筆証明してくれませんか。」と改めての
 頼み、

「よろしい。引受ました。僕はお父さんのやうに豫算の鵜呑はしま
 せんからな。盲従妥協の御心配は御無用、的確な調査を施して、
 賛否を明言させよう！」

此快男子茶目助君、今も昔しに變らぬ腕白黨の旗頭として満鐵に

雄飛してゐる。將來は四百餘州を盛んに茶目化さうと計畫んでゐる
 さうな。

□冥途へ香奠

前鎮海灣司令長官であつた上泉徳彌中將は、頗るの酒豪で、酔ひ
 來れば氣焰萬丈、當る可らざる概がある。

或る時其勢ひで某旗亭に飛込み、簀から棒に、

「おいつ、乃公の馴染を喚べ。」とある。女中が恐る〜、

「お馴染は誰方で……。」と伺ひ奉つたが、どうも聞いた事もない名
 前、暫らく小首を傾むけたのも道理、昔も昔十年以前のお馴染で、

おまけに今は冥途へ住替へしてゐる藝妓。

と聞いた將軍、はらくくと雨滴のやうな涙を溢しながら、

「さうとは知らなかつた、可愛想な事をした哩、ではこれを香奠にやつてくれ。」と十圓紙幣を投出した。

「ですが何處へお届けしてよいやら、家が判りませんが……」と言ふと、將軍大喝一聲、

「役場へ行つて戸籍を調べて見ろつ。」

■ 遞相のわか蘭

大塊野田遞相、朝鮮在住時代に、山縣政務總監の風流を體得して、

蘭の書をかく事を覺えた以來、筆を執れば何がさて置き蘭の書を腕くつて自分も悦び、人にも娛しましむる積りだが、其一揮一葉の蘭たるや、御本尊其儘のいかばかりもなく太いやつを塗抹るのだから、見せられた者は目を娛ませる處か、生體を判斷するのに頭腦を惱む位。

「こりや何んですな、烏蛇が交尾つてゐる處ですか。」と訊く者があるかと思ふと、

「梅雨明に鯉節を干してゐる處ですか。」など、訊る者もある。

「これがわからんとは怪しからん。こりや蘭ちやタイ。」

「ハ、ア蘭ですか、まるで葉蘭か、臺灣産の龍舌蘭のやうですな。」

と冷評かすと、大塊畫伯昂然として、

「朝鮮流行の蘭は、大院君の流れを酌む亡國の細い蘭だが、乃公のは興國的の蘭だから太いタイ。」

□物騒な酒宴

昔藏前の通人が、變つた遊興も仕飽きて、何か珍奇な妙案もないかと考へた揚句、大雪の朝、風呂桶を大勢に擔がせ、浴湯に浸かりながら向島へと雪見と洒落込み、幫間藝妓男女入亂れての雪合戦、手の冷たくなつた者は、湯で暖めさせる珍趣向、

「どうだ此奴ア乙だらう。」と風呂の中から、双方に應援して喜んで

ゐたのはいゝが、餘り永く浴湯に浸つてゐたので、到頭湯氣に逆上つて了ひ、人事不省の茹蝟を大勢が介抱する騒ぎになつたとか、一つ話に残つてゐるが、以下なども其仲間、唯時代が昔と今と違ふ丈である。

「金子計り費つた處で智恵がない、何か奇抜な遊興をしてあつと驚かしたものだ。」と發議したのは、花柳界を金魚のお刺身（註に曰く奇麗計りで喰はれない。）で通つてゐる男、慶應理財科出で、木綿問屋の息子、妻子もある分別盛り、父親に代つて店の束ねをする身が時々脱線、眼の寄る處へ玉の友達二人を誘つて、伊豆の長岡で二三日の保養、湯の宿で口も利かぬ四邊の山と睨つこも張合がな

いと、三島沼津から藝妓を入れさせて騒いで見たが、

「本場の潰島田を見た眼では、どうも田舎の藝妓は肥料臭くつて不
可ない。」と一日で飽きて了つた揚句の相談！

「御説御尤、併しこんな片田舎で田吾連をあつと言はせても甚だ以
て張合ひがない次第だ。」

「田吾連なんぞはどうでもいゝ、苟も江戸つ子で通人の資格を具へ
た我々が、唯斯うして朝晩湯氣に蒸されてゐるのが心外至極、片
田舎は片田舎並に何か變つた遊びがありさうなもの……」と熟識
稍久しうすの態、漸く何か妙案を思ひ付いたか、

「これだ、これに限る。」

女中を呼寄せて酒肴の用意を命じた迄は普通であつたが、

「此座敷で飲むのぢやないよ、温泉に浸りながら飲まうと言ふ越向
だ。」

「ゑつ、それぢや他のお客様が……」

「他の客……？ 今日一日は湯槽の買切だ、それつ。」と計り素より金
子に糸目のない人間、十圓紙幣の二三枚を無造作に投出す氣前のよ
さに、金子に利く世の中、

「それでは他のお客様方にお願ひして、今日丈は女湯へ入つて頂き
ませう。」と容易に承諾、

酒肴を運んだ浴槽の中、好い心地になつて盃の應酬、

「どうだい名案だらう！」と悦に入つて、飲む程に喰ふ程に、湯氣に蒸された酒の酔は餘計上つてくる、

「ウーイ、堪らないね、こんな遊興を今の成金共に見せたいね、どうだ一つ盛んに騒がうぢやないか。」

「騒ぐのもいゝが、三味線なしで騒ぐのなら朝湯で横町の兄哥がやる仕事だ、我々の遊興なら此處へ三味線を入れさせたいね。」

「賛成！ぢや一つ掛合つて見よう！」と女中に頼んで見たが、いくら祝儀の手前でも、此提案は通過が出来なかつた。それも道理、鎌倉鍛冶が十日の間丹精凝らして鍛へ上げた二つ胴土壇拂ひ、いくら命知らずでも飛込む度胸は先づ以て覺束ない。

「仕方がない、代りゝに藝妓の代理をするさ。」と諦めて、茹蛸の男藝妓、取寄せた三味線の撥も皮も破れん計りの大陽氣。

「活惚れゝ、甘茶で活惚れ、ヨイトナヨイゝ。」

「こりや成程珍な遊興ですな、一つ私も仲間入させて頂きまするか。」など物好きな客もあつて、忽ち同勢八人、浴槽の中の大酒宴！ぐでんぐでんに酔潰れた一人が、さも苦しさうに、

「おい水だゝ。」

「呑むのかい。」

「何に浴びるのだ。」とは落語以上の大騒ぎであつた。

將來の敵國

八代風流將軍が京都へ隱棲してゐた當時の事、不思議な事には將軍が支那語を研究すると間もなく日清戦争が始まり、露語の研究を始めて二三年経つと日露戦争が起つた、日獨戦争も矢張同様獨語研究から丁度八年目。さう言ふ因縁から海軍の少壯連中は、

『現在八代將軍が研究してゐる語學で將來の敵國が判るよ。』など言つてゐたので、或る物數奇が、内々目下何國の語學を研究してゐるだらうと探ぐつて見ると、これはしたり、禪學研究と、國語の勉強！
『眞逆いくら何んでも、國民を對手にするやうな戦争も起るまい。』

按摩から肱鐵砲

話は舊いが故巨頭公が同志會を組織した時、後藤男爵と鈴木禿萬君が一緒に福島へ遊説に出蒐けた。其夜禿萬君が、喋舌り疲れの肩の凝を女按摩に揉ませながら冗談言つてゐるのを別室で聞いてゐた後藤男、サラリと襖を開けて、

『おい〜莫迦に話が持てるね、傍で聞いてゐると宛然末は夫婦にでもなりさうな鹽梅だ、何んなら乃公が媒介人になつてやらうか。』と挑戯ふと、女按摩は本氣になつて、

『嫁に行つても、婿に来て貰つても、どつちでもい〜。』と眞面目に

談判が進捗した。一處が何の拍子か、ふと女按摩の指頭が、禿萬君の頭に觸はると、

「おやつ。」と奇聲を發して飛退きながら、

「可厭々々、私は眞逆こんなお老爺さんだとは思つてゐなかつた。

知らないで一緒にならうものなら、又すぐ別にならなければならぬ。」と忽ち愛想盡し！

「あつはつは、天下の選良も女按摩に迄愛想を盡かされるやうではもうお了ひだな。」と大笑ひ。

□ どうやら斯うやら

「吾輩が嘗つて沼間守一君に引立られ、始めて演説をやつた時、登壇したのはいゝが、却々すらくと發言が出来ず、やつとの事で『諸君。』とやると、方々から『否々。』を浴びせ懸けられたので、すつかり悄氣て了ひ、到頭演説を中止したもののさ、處が此頃では、どうやら斯うやら一人前の演説家になる事の出来たのも、畢竟習らより馴れろだね。」と述懐めいた事を言ふと、傍人呆れ返つて其顔をつつくぐ眺めながら、

「へゝえ、あれでどうやら斯うやらですか。貴方のどうやら斯うやらは、人並外れてゐるどうやら斯うやらです、どうやら斯うやらであの位演説れば何も言ふ處はありません。」

無理もない。此どうやら斯うやらの述懐を洩らした御當人は誰あらう島田喋舌郎君！

越後名物「短唄」

テオドラ夫人と精々お睦じい處を見せ付ける代り、折花攀柳の情緒は一向御存知のない尾崎愕堂君、先年同人數名に誘はれ、有樂座へ長唄を聴きに出蒐けたが、

「はて、長唄とは鳥の鳴く真似をするのかい。」と珍妙な奇問を發して傍人をあつと言はせた。すると機轉の利いた一人が、

「君も越後では随分鳴らした癖に、無粹にも程があるぢやないか。」

と一本突込むと、

「いゝや、彼の時分は猪打計りに熱中して、長唄處か短唄一つ覺える暇がなかつたよ。」

以來尾崎君の「短唄」は同人間の評判となつた。

變つた一癖

憲政會の神藤才一君は一風變つた人物で、自宅を出る度毎に、鼻紙を折つて植木の葉を撫でた上押戴いて懷中へ入れる。途中北方を向いて歩るく時には、假令どんな人に出遇つても決して挨拶しない、南に向ふ時には徐かに歩るくが、北方に向くとサツサと疾走する。

外出して歸宅の際、自邸の門前迄來ると、必ず時計を見る。もしそれ定刻より早いと、御叮嚀にも時間の來る迄門前をぶら／＼迂路付く。それから愈々門内に這入る段になると、自由に開閉出来る門を、コツ／＼叩いて妻君か下女の出て來る迄は待つてゐる。玄關を上つて室に通ると、先づ妻君の顔を兩手で撫で、それから下女の顔をピシヤリと殴るのが奇癖！

「ありや一體何んの巫呪ひだか薩張分らない。」と或る人が小首を傾けると、口の悪いのが、

「何あにね、和女はこんなにか愛がるが、他の女は見向きもしないよと、一々妻君に報告するのさ。」

支那關係の實業家連中が、一昨年の春汪大燮君を帝國劇場に招待した折の事、用意萬端整つて賓客の來るのを今や遅しと待受けてゐる處へ、物々しき面構へをした一人の老人が悠然としてやつて來た。

□ 評判程でもない尖頭

案内に立つたのが生憎と物馴れぬ先生、適つ切それと早呑込み、豫て設けの席へと案内に及ぶと、

「うむ。」と大きく頷いて、導かれる儘跟いて行つたが、どうやら勝手が違ふ様子に、老人妙な顔して、四邊を顧廻しながら席に座らな

い、それも其筈、

「清座々々。」とすつかり支那人扱ひされたからで……、其瞬間、

「これは！」と計り漸く気が付いた案内掛り、後で頭を搔ながら、

「寺内さんも繪で見える程頭が尖つてゐませんね。とは振つてゐた。

誰あらう！其老人こそ時の首相寺内尖頭伯であつたのだ。

□ 禿 山 苺

お年の方よりお頭の方が、年々光輝を放つてくる兒玉前翰長を官邸に訪問して刺を通じると、聽て奥から引返して來た給仕君、

「翰長は只今髪を刈つてゐますから暫らくお待ち下さい。」

其人、

「ぶつ。」と噴飯して、

「翰長に髪はない筈だが、一體何處を刈つてゐるだ？」

どう聞き間違へたか給君頗る大真面目で、

「はいおく……」

「何？おくび……は、お襟頭の處か！」で居合はせた誰彼一時に、

「うあつはつは。」

□ 『町の娘』の接待振

九州に大演習のあつた時、當時の内相後藤和製ルーズベルト閣下

の宿舎しゆくしゃにあてられた家は古ぼけた客な宿屋やどや、これに氣きの付ついた縣けんの當局者たうきやくしや、

「御機嫌ごきげんを損そんじると後の祟あまりが恐おそろしいぞ。せめて給仕丈きよじだけは吟味ぎんみして差上げろ。」と堅氣かたき作りの美形びけい數名すうめいを「町の娘むすめ」と言いふ名なで侍はんべらした。すると此所謂このいはゆる「町の娘むすめ」なる女をんな、秘書官連ひしよくわんけんが盛さかんに飲のんでゐる席せきでつひ、

「此處ここの知事ちじさんは踊をどりがお上手じやうずよ。」なんて事ことから、到頭問たうとうとふに落ちず語かたるに落おちて了しまつた。其揚句そのあげく散々さんく秘書官連ひしよくわんけんから油あぶらを取とられ、「どんな無理むりでも肯きくわ、其代そのかはり今晚丈こんばんだけは町まちの娘むすめで置おいて下ください。」さる程ほまに、其後須磨そののちすまで後藤男ごとうだんを或ある船成金ふねなりきんの別莊べつさうに安置あんちしたが、

氣きの利きいた清野知事きよのちじが、「土地一流とちりゆう」と銘打めいうちつて、公然おほびらに藝妓げいしやのお給仕きよを遺物つがひものにした。内相眼尻ないしやうめりを下さげ、鼻眼鏡はなりがねも落おちん計はかりの大恐悦たいきやうはつ、「三田尻みたじりの娘むすめも捌さばけてゐたが、これは又格別またかくべつぢや。」との御託宣ごたくせん。秘書官思しよくわんごもはず噴飯ふきだして、

「閣下かくが三田尻みたじりのも花柳このみちの女もので、而しかも二枚鑑札まいかんさつですよ。」と始はじめて明あかす手品てじなの種たね。男爵吃驚だんしやくくびつくりして、鼻眼鏡はなめがねを兩手りやうてで押おさへながら、「どうして此眼鏡このめがねが曇くもつたのだらう？」

御難の艶福

東京府とうきやうふの前田理事官まへだりじくわんが一昨年さくねんの二月ふわつ、巢鴨病院すがしびやういんの移轉問題いてんもんだいで、態わざ

態質地調査に出蒐けた。廳て三等婦人室の前を通り蒐かると、一人の妙齡の美人？が前田君の顔をジロ／＼眺めてゐたと思ふと、突然飛付いて頬邊に接吻、驚くまい事か、命辛々逃出した前田君、「假令官命でも、今後巢鴨丈は斷じて行かない。」と、お節介が、「官命より夫人の命令の方が恐ろしいのだらう？」因みに前田君は有名な好男子である。

■ 蚯蚓信者

場所は御殿山、入口が透逸してゐて自働車などは通行禁止、名けて蚯蚓小路と言ふ。

其處の主人長尾半平氏は有名な基督教主義夫唱婦隨の格で令夫人も亦大の迷信嫌ひであつたが、どうした拍子が蚯蚓が地龍と言つて、漢法醫が解熱藥の秘方としてゐるのを、物は試しから服用して見ると、果して古人我を欺かず、其處で夫人急に大の蚯蚓信者となつて家内に感冒患者などが出来る、醫者の診察より先きに「まあこれを服用で御覽！」と土臭いやつを煎じて服用せ、かうして効驗著かなるを矜つてゐた。

半平氏も最初の中には何の蚯蚓がと計り、對手にもしなかつたが先頃遅走せに流行感冒に罹つたので、苦しい時の神頼み、早速土臭いのを我慢して用ゐて見ると、効能立處に顯はれて全快。

「成程！」と手を打つて、以後夫妻俱に熱心な蚯蚓信者になつた。
 「乃公がもつと早く蚯蚓信者になれば、三好（故傳育官長）も殺さないで済んだものを……」と悄然として嘆じてゐるのは、最近同郷の友人三好傳育官長が、世界感冒の犠牲になつたのを残念がつてゐるのである。

「君、風邪を引いたら蚯蚓を服用給へ」と今では友人が咳一つしても直に蚯蚓を盛んに奨勵してゐる。

眞平氏の力彌

高梨哲四郎氏の根岸御殿で、紳士連が素人芝居をした事がある。

狂言はお定りの忠臣藏で、主人公の高梨氏は茶屋場のお軽、力彌に扮したのは、誰あろう先頃物故された角田竹冷宗匠！

「先生、眞實にお上手ですこと……」なんて取巻連に煽てられて、御本人大いに納つてゐたが、其後或る酒席で、幫間の魚海太夫、
 「今日はお慰みに珍らしい物眞似をしてお目にかけますう。」と口上よろしくあつて、

「エ、これは角田先生の力彌でござい。」と文箱を持った屁放り腰、珍妙不思議の格好を髻髻させられて、御當人頗る感に打たれて了ひ
 「成程、あの格好は乃公に見えなかつたよ。」とそれから決して素人芝居に出なかつた。

□ 飛んだ愛讀者

小説『煉瓦の雨』の著者沖野岩三郎氏の許へ名も知らぬ人から一通の節書、開封して見ると、

『貴著一部御惠送を乞ふ。』と言ふ依頼、自分の小説の愛讀者だらうと、早速送本しやうとしたが、少々變な處があるので、もう一度手紙を熟讀して見ると、

『貴著は耐火煉瓦を製造するのに、大いに参考になるさうだから……』の文句、沖野君急に落膽して、

『到頭俺を煉瓦焼の職工にして了つた哩』

□ 犬猫小便すべし

憲政會の彌次組として議會に隠れもない名物男黒須龍太郎君の住宅の黒板扉に一札が打付けてあつて、其文句が又頗る黒須式を發揮してゐる。曰く

『犬猫小便すべし』

其處で或る人が黒須君に、

『犬猫が小便御免ならば、人間は尙更差聞へなしと言ふ譯かね。』と一ぱし遣込めた氣で言ふと、黒須君平然として、

『成程公徳心のない人間なら、犬猫同様に取扱つてもいい譯さ。』と

其人ギヤフンとして二の句なし。

■ 逆さ業平

一昨々年犬養木堂君が、信州上諏訪へ行つた時の話、三宅雲嶺博士が講演に来ると言ふのを聞き込み、出立間際になつて、

「三宅さんは東京でも有名な高襟な優男だ、お前達は岡惚れしない要心するがよい。」と例の悪戯を旅館の女中達へ置土産、其態度が奈何にも真面目で本實らしいから、女中共今夜こそは大正の業平様御入來と計り、満艦飾に白粉を塗立て待つてゐるとは夢にも知らぬ博士一行、高襟處か揃ひも揃つた蠻般な醜男連中、變に思つた女中の一人、

の一人、

「博士は一汽車遅れてお着ですか。」

「博士は彼處にある、何を見違ひしてゐるのだ。」と悪戯の種を知らない一行の一人が、村夫子然たる博士を指さし教へたが、

「いゝえ、三宅博士はもつと高襟で、もつとずつと好い男子です。」

■ 土屋違ひ

つひ最近の事、床次内相夫人が危篤の際、家人が侍醫の土屋醫學博士に電話をかけて、診察を乞ふた、自動車を飛ばせて博士が内相官邸の玄關に乗附け、執次の者に、

「土屋ですが……」と言ふて、稍暫らく待たせた上、

「こちらへ……」と案内したは病室ならぬ應接室、

「どうやら様子が變だ」とは思ひながら、椅子に倚つて待つてゐたが、小一時間も誰一人夫人の病室へ案内する者が出て來ない、追がの博士業を沸して、卓上の呼鈴を自暴に叩いて、

「一體人を呼寄せて置きながら、こんなに待たせるとはどうした事です？」と極付けると、聽てそれが奥へ通せられたと見え、出て來たのは、床次内相、

「何か用かね？」と取つても付かない挨拶、腹が立つよりも狐に魅まれたやうな博士、

「電話で診察をと言ふ事ですから……」と呆れ顔に内相に言ふと、

「診察？はて貴方は誰方で……？」

「侍醫の土屋です。」

「ヤツ、こりや濟みませんでした。私は又代議士の土屋清三郎君が何か用事があつて面會に來られたかと思つて、生憎家内に病人があるの、應接室に通して置きましたが、あゝ土屋博士でしたかこりや何んとも申譯がない、サアどうぞ……」

□ 奇抜な女中募集廣告

池袋のさる家の塀にこんな貼紙がしてある。

急 告

女中さん優遇!

まゝなれど、まゝたきだけはまゝならず、うまくまゝたく女の欲しや。

朝寝よし、居眠りもよし、喰ふもよし、めしたくだけを神妙にして。

のんきな事此上……………

日本人に限つたこと……………

實際用事少……………

教育程度問ふ事……………

来れ……………!!

なし

とやつたは近來珍無類奇抜な女中募集であつた。

乗違ひ 曳違ひ

一昨年十月、東北の野で大演習のあつた時、陸軍大將の花形、上原、浅田兩將軍を乗せた列車が、弘前驛に停まつた。兩大將が昂然としてプラットホームに降り立つて、驛を出ると、二人の車夫が、急いで俵を兩將軍の前に曳き寄せて、

「統監部の御命令で、お迎ひに参りました。」とある。兩大將心得たりと、ヒラリ飛乗ると、田舎車にも似合はぬ韋駄天走り。と迄はよかつたが、ふと上原將軍氣が付くと、豫て自分に指定された旅館

の新若松樓の前を、平氣で素通りするので、大將堪らず、
 『コラッ何故乃公の宿へ案内せぬのだ？』と一喝したが、一向驚か
 ず、尙も速力を加へて驀然ら、漸つとの事で棍棒を下した處を見る
 と、これはしたり、麗々と『淺田大將閣下御旅館』
 斯くとも知らぬ一方の淺田大將、車上ながら、
 『はて心得ぬ。』と不審の裡に着いた宿には『上原大將閣下御宿』

回 便所籠城

昨年九月二十七日の朝、横須賀發の上り列車に、大船驛から乗込
 んだ紳士があつた。聽て列車が横濱近くへ來ると、件の紳士の姿が

便所に没したかと思ふと、遙かに悶え苦しむやうな唸り聲が聞えた。
 『時節柄、こりや適つきり虎列刺患者に相違ない。』と同乗の人々が
 大騒ぎで、扉を開いて見ようとしたが、こは奈何に、突けども押せ
 ども開かばこそ、其中列車は遠慮なく東京驛に着いたが、扉は依然
 として現狀を維持してゐる、同乗連も持倦んで驛員に引渡して其儘
 立去つて了つた。

『そりや大變！』と大急ぎで、職工を呼寄せ、扉をコチ開けて見る
 と、中から汗みどろで、薰臭身にしみて出て來たのは、國民黨の名
 士鈴木梅四郎君！

福原君の潜在精神

福原前文部次官の失敗話は、珍らしくもないが、去^き年^{ねん}七月新聞記者團から招待状を頂戴に及んでゐながら、遂^つひ仕事の多忙しさに場所も時間も忘れてゐた。漸^{やう}やく仕事^{しごと}が片付いて、ふと思ひ出し、

「何^なんでも濱町の常盤だつたつけ。」と潜在精神を喚起して、時を移さず馳付けて見ると、これはしたり『本日休業』の札が、宛然夫子の疎忽を嘲笑ふやうに、ぶら下つてゐる。

「では小常盤だつたかしら！」と近所の小常盤へ行つて見ると、是亦^{また}ひつそり閑と宴會らしい景色もない。

「はて何處だつたつけ。」と様々小首を傾けて思案の末、やつと上野の常盤華壇であつた事が判つたので、

「それ急げつ。」と計り、俥夫を急ぎ立て来て見ると、最早宴は散じて、誰もゐなかつた。

政友會の理屈

犬養國民黨總理が、一昨年^{さくねん}の春伊豆の長岡から歸京の途次、國府津^つ迄來ると、二人の勞働者が、職員に急ぎ立てられ、忙て乗つたのは一等室、どうやら車中の様子が變なのに感付き、虚呂々々四邊を顧盼しながら、

「おい此處は一等室ぢやねへか。」と言ふと、一人の男が、
 「ウンさうだ、だが座らずに立つてゐたらよからう！」
 この私語を聞いた犬養君、傍人に曰く、
 「成程、政友會の理屈にもあつた言ふのがあつたつけ……」

□ 勿體なさ過ぎる

木越將軍が、先年或る休日、質素な和服でステツキ一本抱へ込
 で、瓢然外出し、途中立寄つたのは一文房具店、
 「おい筆を見せてくれ。」との注文に、先づ持つて來たのは、一本六
 七錢の粗品、

「もつといふのはないか。」と言つたが、出す筆も出す筆もみんなお
 粗末な物計り、

「もつといふのを……」を四五遍繰返した揚句、やつと出して來た
 のは勿驚大枚金一圓の筆！

「真逆こんな身装で、一圓の筆は買へる筈がなからう。」と頭から莫
 迦にして、將軍の顔を凝乎と見詰めてゐる。將軍暫らく黙考の上、
 平氣な顔で、

「もうこれよりいふ筆はないのか。」

當時の陸軍大臣とは知る由もない筆屋、へツポコ書家が何を生意
 氣なとも思つたのだらう！

「看板を書くのには、其筆でも勿體なさ過ぎるのです。」

□ 死人の傍でコラサノサ

理學士田邊尙雄君曰く、

「日本の樂人なんて、てんでなつてゐないよ、死んだ時に奏する樂だつて、眞に悲しいものは一つもない、越天樂と言つて賑やかな樂なんか濟まして奏つてゐる、あれぢや死人も安らかに寝られない、丁度耳の傍で、コラサノサと囁し立てると同じだからね。」

こりや奇抜だね 畢

大正八年四月拾貳日印刷
大正八年四月拾五日發行

(定價七拾五錢)

著者 ずぶ六

こりや奇抜だね

附 奥

不許
複製

發行者 東京市小石川區東青柳町二九池清一
印刷者 東京市下谷區入谷町三九六金山佐次

發行所

東京市小石川區東青柳町二九
岱正堂書店
特東京三九五二二番

281-108₂

101
101

終

